

Read, J. (2004). Plumbing the depths: How should the construct of vocabulary knowledge be defined? In P. Bogaards & B. Laufer (Eds.), *Vocabulary in a second language* (pp. 209-227). Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.

Abstract

- 第二言語における語彙テストにおいて、「深さ」という用語が定着してきたが、研究者によってその使われ方が異なっている。本章では、(a) 意味の正確さ、(b) 包括的な語彙知識、(c) ネットワーク知識という3つを概観し、それぞれに関係するテスト方法を考察する。また、広さと深さの比較をしている研究についても概観する。そして、「深さ」という用語では不十分であるため、より正確な定義を用いるべきだという提案を行う。

1. Introduction

- L1, L2 共によく知られている語彙の測定方法には以下のものがある。
 - ・ checklist (目標語を知っているか知らないかを学習者が示す)
 - ・ recognition item (目標語を他の関連ある単語などとマッチングする)
 - ・ recall-type item (文などから消された語を学習者が埋める)
 - ・ translation (L1 から L2 への訳)
 - ・ interview (学習者の語彙知識から、定義などを引き出す)
 - ・ speaking and writing tasks (ある目標語彙を用いて産出させる)
- 以上の中からいずれかを選んで使用するには、理論的な根拠が無ければならない。その1つに語彙の広さと深さがある。広さは、知っている語数のことである。一方深さは、どの程度、特定の語が知られているかである。
- しかし、このように単に二分するだけではなく、より精緻な区別が必要である。深さについては少なくとも以下の3つの異なる分野がある。
 - (1) precision of meaning (曖昧な知識 / 精緻な知識)
 - (2) comprehensive word knowledge (意味だけではなく様々な側面についての知識)
 - (3) network knowledge (心的辞書内のネットワーク)
- この3つはかなりの部分で重複し、特に (2) の中に (1) と (3) を含むと考えられるかもしれないが、それぞれが様々な研究者が「語彙知識の深さ」と考えているものにあたり、また測定に関しては異なる方法が用いられると考えられるため、この3つを区別した。
- 以後、この3つについてテストの種類に焦点を当てて概観するが、本章での考察は以下の3点に限定する。
 - (1) この3つのアプローチは、ある特定の時点での学習者の語彙知識とも、語彙発達のプロセスとも捉えられる
 - (2) 語彙知識のテストは、宣言的知識に関することとする
 - (3) 今回見ていく研究では、語彙知識とは個々の語の形 (individual word form) を知っていることと定義する

2. Precision of meaning

- 高頻度語の多くは、文脈が無い場合は特に曖昧であったり、また他の語であっても多義語の場合がある。また、日常で使用する語と専門用語、という区別もある。このよ

うな意味的な特徴の多様性は、母語話者の語彙知識に反映されている。

- L2 においては、学習者が意味の習得を達成したか、それとも達成していないかを測定することが目標である。これには大きく3つの方法がある。

2.1 Test items requiring precise knowledge

- 意味の正確さを広さの知識と区別する第一の方法は、テスト項目を、目標語のより細かい知識が必要なものにするということがある。例えば多肢選択式では、選択肢を書き換えることによってより細かい知識を測定することが出来る。

(例) A disaster is ruin which happens...

- a. suddenly b. within a year's time c. to all people d. gradually

2.2 Self-report of degrees of knowledge

- 二番目の方法として、尺度の上で語彙知識の程度を測定するものである (cf. Vocabulary Knowledge Scale by Wesche and Paribakht)。

(例) Stage 1: "I never saw it before."

Stage 2: "I've heard of it, but I don't know what it means."

Stage 3: "I recognize it in context—it has something to do with..."

Stage 4: "I know it."

- 曖昧 / 正確な語彙知識は、語彙研究において根深い観念である。例えば Melka (1997) は、受容語彙知識と発表語彙知識は二分できるものではなく、連続しているものであると提案した。しかし、語彙の意味の習得が一樣に発展するという考えは、Meara (1996) の、語彙の意味を忘却することは、覚えることの過程の一部であると述べ、Meara and Rodriguez Sanchez (2001) は、単語はある知識の段階から他の段階へと前後する、と述べていることとは反している。

2.3 Elicitation of definitions

- 第三の方法は、学習者に単語の意味を説明させて、その説明の質を評価するものである。単語の意味の説明は、10歳頃までは具体的・機能的・描写的であるが、思春期になるとより抽象的で分析的な、正式な定義と似た説明をするようになる。従って、子供を対象としてこれを行う場合には、語の特定の使用に焦点を当てたものよりも、脱文脈化した応答により高い評価を与える。
- また、上位語を定義に含めることが、正式な定義である重要な要因とみなす研究もある。しかし、大人と同じような定義が出来ることは、十分な意味情報を持っているかどうかだけではなく、定義とはどのようなものか、を知っているかどうかにも関わる。更には、脱文脈化した定義を言えることが正確な知識の基準といえるかどうかについては疑問が残る（暗記が可能、単語の意味を知っていることと定義を知っていることの違い）。
- 以上から、知識の正確さとは、辞書の定義で表現されるような単語の中心的な意味のことを言っているのかどうか疑問である。おそらく、*elaboration or richness of meaning* という言葉が正確さと取って換わられるべきであろう。もしくは、“word” という概念全体の変わりに “lexical unit” という言葉を用いて、テスト作成者に語彙の特定の意味の使用や文脈内での使用を許容するようにすべきであろう。

3. Comprehensive word knowledge

- 「深さ」の二番目の概念では、意味だけではなく様々な構成要素を視野に入れる。Nation (2001) は次のようなカテゴリーに分類し、更にこれらは受容知識と発表知識に分類されている。

Form:	pronunciation, spelling, word parts
Meaning:	form-meaning relationship, concept and referents, associations
Use:	grammatical functions, collocations, constraints on use

- 全ての構成要素を測定しなければならないとなると、テスト作成が非常に複雑になる (Schmitt, 1998 では 11 語について 5 つの観点を調べるのに、一人につき 2 時間かかった)。
- 実施上のことだけではなく理論面においても、数語について多くのデータを取ることがテストの目的に適うかどうか、という疑問がある。そのような測定方法は、言語教育プログラムの意思決定においては、有効な情報にはならないであろう。
- では、それにとって代わるような枠組みはあるのだろうか？もし学習者が「より高度な」知識を持っているのであれば、その単語に関する「基本的な」知識を持っていると考えられる。このような考え方は Drum らによって発展され、以下のようなカテゴリーが作成された。

A. Perceptual	-	physically similar words	lowest
B. Syntactic	-	internal structure or grammatical function of words	↑
C. Semantic	-	general meaning dimensions of a word	↓
D. Correct	-	a specific correct definition	highest

- このうちの C と D では、2 で扱った意味の正確さについての尺度である。この尺度は有効なものではあるが、一般的に使用できるものではない。この理由には 2 つある。1 つ目の理由は、この尺度はリーディング用のものであること、そして 2 つ目の理由は、この尺度は小中学生からの反応に基づいているため、より年長の学習者には向かないかもしれないことである。
- 語彙知識の様々な構成要素間について調べた研究はほとんどないが、Schmitt & Meara (1997) は、形態素の知識と関連語の知識に中程度の相関、そして関連語の知識と語彙サイズ、また関連語の知識と一般的な言語熟達度の間にも中程度の相関があることを示した。
- このような研究はもっとなされるべきであり、また語彙の意味の様々な側面をどのような順番で学習していくかは、未だ結論付けられないであろう。

4. Network knowledge

- 語彙知識の深さを測定する 3 つ目の方法としては、語彙ネットワーク構築の側面から考えられたものがある。この方法の前提には、新しく習得された単語は、既に知っている単語のネットワークの中に取り込まれ、結果としてネットワークが再構築されるという考え方がある。この 3 つ目の方法は、他の 2 つの方法と異なる点がある。それは、この方法はメンタルレキシコン内の語と語の間のつながりの発達に焦点を当てていることである。
- 語彙ネットワークを調べる基本的な方法は語彙連想課題であり、これは刺激語が提示され、最初に思いついた単語を答えるというものである。大人の母語話者は特定の反応をすることが知られており、また子供は syntagmatic から paradigmatic な連想に移行することが知られている。一方 L2 では、どのような学習者が音韻関連に基づいた連想

を行い、またその連想が英語母語話者の基準との関連で解釈できるのかどうか研究の焦点になっている。

- より現実的に語彙知識の深さを測定するために、Read (1993, 1998) は語連想のテストを開発した。これは、目標語 1 語に対し 6 ないし 8 語があり、目標語とどのような関係 (paradigmatic, syntagmatic, analytic) にあるかを答えるものである。

contract

agreement confident formal notice sign special

5. The relationship between depth and breadth of knowledge

- 語彙知識の広さと深さの関係については、強く関係し合っているという証拠はあまり出されていない。Vermeer (2001) や Schoonen & Verhallen (1998) は両者の間に高い相関関係があるという結果を出しているが、この 2 つの研究は共に子供を対象としており、この場合、認知的な発達が影響を及ぼしている可能性がある。従って、年長の学習者を対象にした場合は、異なる結果が出る可能性がある。
- 大人の英語学習者を対象にした Qian (1999, 2000) では、広さと深さの間の相関係数は高かったが、重回帰分析において深さのテストは、広さのテストでの説明率を有意に上昇させていた (従って、深さのテスト独自で寄与していると考えられる)。また、Nurweni & Read (1999) での相関係数は .62 であったが、熟達度ごとにグループ分けをすると、上位群での相関係数は高かった一方、下位群での相関係数は低かった。従って、熟達度が高くなると広さと深さの知識が収束する可能性がある。
- 但し、この 3 つの研究における語彙知識の深さは全て関連語についてであるため、より様々な深さの側面と広さの関係について調べる必要がある。

6. Conclusion

- 本章では、語彙知識の深さという言葉が少なくとも 3 つの意味で用いられていること、そして、それぞれに特徴的なテスト形式があることが明らかになった。自己報告式のテストや L1 と L2 の意味をマッチングさせるだけのテストだけではなく、語彙知識の側面を測るテスト項目の可能性について目を向けなければならない。測ろうとしている側面を注意深く定義し、「深さ」のように何でも含んでしまうような用語を単に用いるのは避けるべきである。
- また、語彙の測定は宣言的知識に限られてきたことを認識する必要がある。学習者がその単語について何を知っているかよりも、その単語で何が出来るかを調べなければならない。従って、学習者の語彙の能力を完全に知るためには、宣言的知識の測定は語彙使用のテストで補完されなければならない。

疑問・コメント

- 語彙知識の深さを 3 つに分けているが、2 つ目の観点 (comprehensive word knowledge) が他の 2 つと比べて、定義が広すぎるのではないだろうか。そうであれば、この 3 つの枠組みを使用するよりも、Nation (2001) が提案している 9 つの観点をういた方が、「語彙知識の深さ」のどの側面に焦点を当てているのかを、正確に表すことができるような気がする。
- 今までのテストは宣言的知識のテストに限られてきたと書かれているが、受容語彙知識における手続き的知識を測定するのは難しいのではないだろうか。この章では、発表語彙知識についてあまり触れられていなかったが、スピーキングテストや英作文の中での語彙の使用を調べるということであろうか。